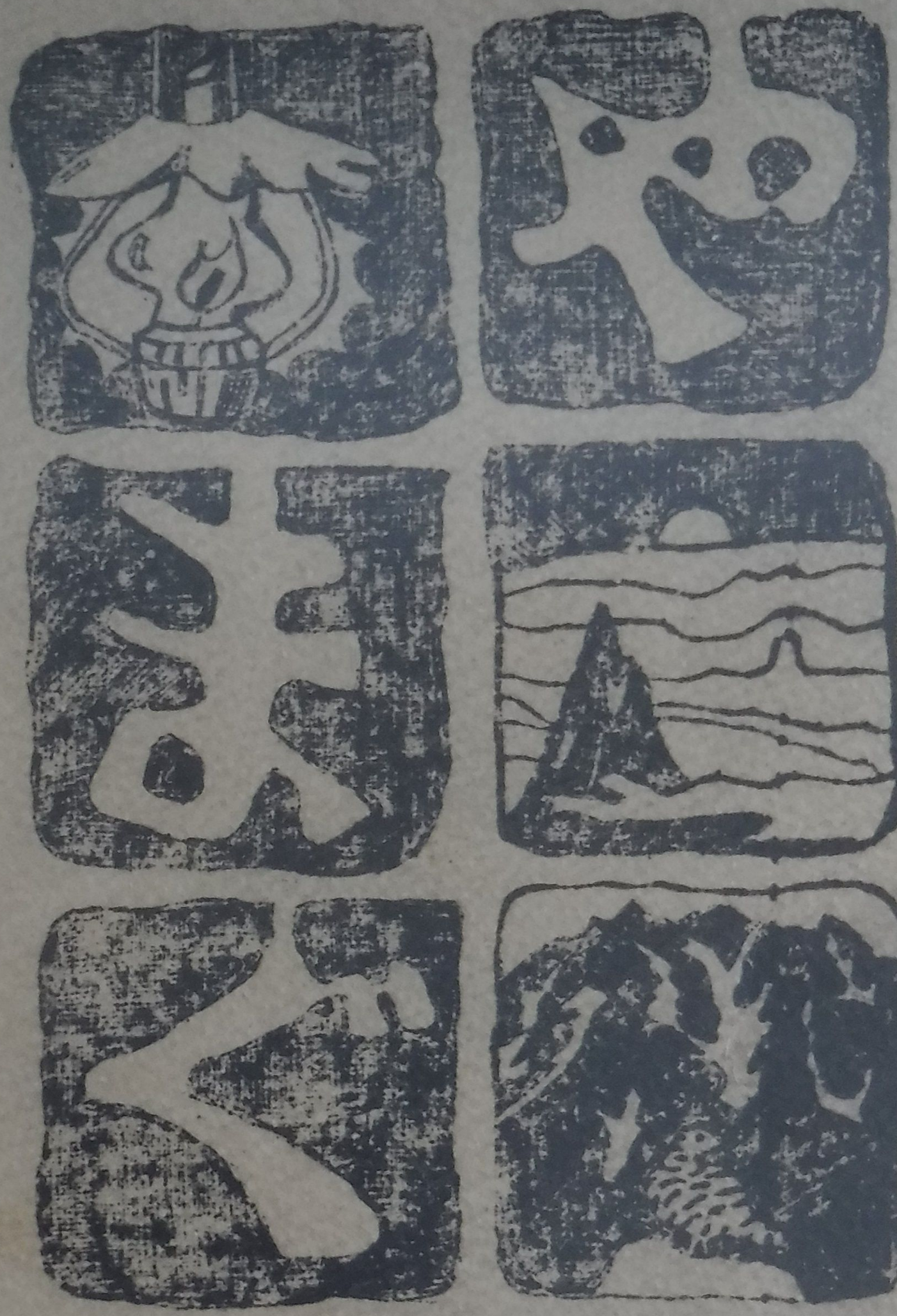

1973
NO.5
SWVOB

ちきゅう



だい5ぶん

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

夏合

"雨にぬれても…"

…… 新妻 巳 ―正

(白峰三山のみ)

(夏合宿キロク)

五月合宿

…… 泉 篤志

(五月合宿キロク)

三ツ峠山行

…… 諏訪部 信十

48年度 行事報告

"て" 嶋崎三郎

年表

(特別に題は決まってないのだ!)

16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31

富士山一週ワンデリング概略図

富士山一週ワンデリング

宿 ― 奥和楽部平ヶ岳（上ゲン五段目まで） ― 交歓会・布団会（木村荒 文と絵 新津正己） ― 総（第12回）― 富士山一週ワンデリング（第14回）― ★一・三コース 佐藤千秋（第17回）― ★二コース 大房利男（第18回）― ★三コース 小林ほるみ（本十冬の登山） ― 広島直子

編（第12回）― ★一コース 鳥崎三郎 ― ★三コース 広島直子

SWVOB 年表

1973～4

4	1	発会
	14-15	三ッ峠山行 （新入会員歓迎山行）
	28	定例会
5	3	5月合宿－奥秩父 （瑞牆山．小川山．金峰山）
	12	定例会
	19-20	富士ワンデリング（オ12回）
6	3	富士ワンデリング（オ13回）
	6	定例会
	16-17	富士ワンデリング（オ14回）
7	14	定例会
	27-31	夏合宿 （南アルプス白峰三山）
8	4	定例会
	17-19	奥秩父縦走キャンプ
9	8	定例会
10	6	定例会
	13-14	お月見山行 （雨で中止！）
11	3	富士ワンデリング（オ17回）
	10	定例会
	23	現役・OB交歓会
12	1	定例会
	8-9	忘年会 （西沢渓谷ナマクントハイク）
	15-16	富士ワンデリング（オ18回）
1	12	定例会
2	9	定例会
3	9	定例会

「やまぐつ」も回を重ねて5号になりました。今までは会報発行の度に原稿の催促をしたものでしたが今回はあえてそれをしませんでした。その結果この会報が出来上ったわけです。

この会報に何かしら問題があるとあなたが感じるとしたら，それはいともなおさず今のO・B会の現状をあなたが感じていることだと思うのです。

会報役員　嶋崎三郎

昭和48年度　行事報告

今年度1年間の行事を、順を追ってここに載せました。それぞれの行事についていろいろな事を感じると思います。O・B会行事をただ単に「思い出」としてすましてしまわないように、それぞれの行事の中から何か新しいO・B会の姿を見つけだそうとする人。OB会のメンバーがそれぞれの行事を一緒になってすることで、ひとつひとつの「思い出」になればそれでいいのだと考える人。いろいろです。

でそのいろいろな人間がいるのがO・B会です。要はそれぞれの人が、1つの行事から何を感じたかということがわかればいいのです。ですからお互を行事を書いてもらいました。それがこの「行事報告」になったのです。ですからこれを読んで何かを感じたらそれでいいのだと考えているのですが。

——嶋崎三郎——

4月　三ッ峠山行
（新入会員歓迎山行

5月　5月合宿
（奥秩父：瑞牆山・小川山
金峰山）

7月　夏合宿
（南アルプス：白峰三山

8月　奥相模沢肝キャンプ

11月　現役との交換会

12月　忘年会
（西湖パノラマウントパーク

〔年間を通して……〕　富士山一周ワンデリング

4月 三ッ峠山行

1973年4月14へ15日

参加者：諏訪部信一　倉地哲郎
　　恩田美臣乃　小林はる子
　　大用知也　江成和彦

コース　東桂駅より廃道を通り三ッ峠山頂へ。ふ

三ッ峠の地図を見てもらいたい。そこの山頂近くは、岩登りの練習場として大きさ、難易度、そして展望の美しさからしても絶好のゲレンデである。我々がそこにアプローチするには、富士急線三ッ峠駅よりの道・母の白滝を経ての道、御坂方面からの道といくつかのルートがあるが、そのどれもがきちんと整備された立派な道である。

我々は、一昨年の6月、富士山周辺のワンダリングの第一歩を始めるにあたって、東桂駅より三ッ峠へ尾根づたいに登る道を探ってみた。五万分の一の地図には尾根づたいに途中までルートが記入されていたし、古いニッケのガイドマップには一般ルート以外として道が記入されていた。我々がそのコースを歩いた事により知り得たことには、たしかにルートが存在していた事実で、しかも、過去においては非常に多くの人が利用したと思われる事である。現在は道標も倒れており、道は落葉に埋り、一部ではまったく消滅している部分もあるが、そこに道があった事実をかくす事は出来ない。今回このコースを選んだ理由は、計画時に新入会員に重点を置いた山行と言う事で、古い道やまったく道のない部分、そして山頂に到着してから岩登りの練習という、1つの山行の中に多くのものを求め、さらに静かな山行をと言うものであった。高校の頃はやぶこぎもほとんどなく、ルートを捜しながら登るということはまったく無いわけで、O.B会へ入っての第一歩としては非常に価値のあるものになると考えられたわけである。さらにハイキング的に考えられるような三ッ峠への山行も、コースによっては人に会うこともなく、美しいお花畑に会う事もあるという事を再認識する機会とも思えた。

もっとも現実には多くの人が時間

の人が時間の都合により、新会員は1人も参加出来ないと言う結果になった。

八王子を臨時の河口湖行鈍行に乗って出発した。乗った時は、当然東花にそると思っていたが、大月近くになって、その考えの甘かったことに気がき、大月で下車、富士急の始発を待って東桂へ。別行動の大用、江成が着いたので最後のミーティングをした。二人は車で河口湖へ出て、御坂トンネルの方から林道を三ツ峠へアプローチすることになっていた。山頂での合流時間、場所を決定して、3時駅を出発。前回の記憶と地図を頼りに夜道を歩いた。途中の温泉場へは1時間ほどで到着した。ここは旅館が二軒ほどあって、川の流れと山に囲まれた静けさが、なんとなく人里離れた山里を感じさせる所である。全員ヘッドランプをつけ、闇の中を黙々と歩くこと1時間半、前回笹の葉に悩まされた場所へ。私と倉地の2人は前回参加しているので、道に対する記憶もあり、順調に歩を進めて行った。順調をとった頃から天気の具合が思わしくなくなり、霧雨になり、我々は草の露と霧雨に身体のぬれるのを気にしながら一歩一歩進んでいった。途中、非常に霧が濃くなったりして、我々の気持に不安な要素を加えながらも8時15分山頂に着くまでなんとか持ちこたえてくれた。8時45分山頂近くの小屋に入り、オニグループの到着を待つ事にしたが、遂に降り始め、オニグループが到着しても岩登りの練習どころではなかった。4月中旬の三ツ峠の雨はみぞれから雪に、そしてみぞれに気ぜわしく変り、私を悩せてくれた。10時40分重い腰を上げて、御坂トンネルの方に下山する事に決定し、雨の中を三ツ峠山バス停へと下っていった。

雨の中傘をさしながら林道を下り乃っと見上げると真白なこぶしの花が雨に打たれながら我々に微笑(ほほえみ)かけてくれる。こんな4月の1日であった。

(以上、諏訪信一記)

5月合宿

1973年5月3日～6日

場所：（奥秩父）瑞牆山
小川山　金峰山

参加者：天羽．大用．金子
鈴木．原．大房．千葉
小林　嶋崎．佐藤
江成　新津　菅沼．泉
練間．長谷川　前場
木村．山田．阿部．
松本、近野、井上(京)
井二(富)　井上(令)
(以上26名)

（経過）

5月3日(木) 快晴

相模原→八王子→韮崎→増富
←小休(昼食)←金山山荘←
←瑞牆◐…テント設営、嶋崎．新
澤．小林．近野．松本が瑞牆山へ残
りは自由行動、食事かしたくなど。

5月4日(金) くもり (5時起床)

◎瑞牆山コース：大用．江成．前場
◐-取付点←登はん終了←山頂-◐
◎瑞牆コース：泉、長谷川．菅沼
佐藤
◐-富士見平←小休←山頂←◐

小川山コース：千葉．練間．大房
新津　嶋崎、小林
松本　近野
◐-富士見平-分岐-八丁平(L)
-小休-水晶ひろい-小川山-
水晶取り-小休-大日小屋-分岐-
林道-◐
---夕食後フィヤーをたいて雑談。
夜、阿部．木村．井上(京富玲)着
(就寝 24:00)

5月5日(土) 快晴

金峰コース：嶋山崎．新津．大房．井上
(京玲富)．木村．阿部．山田
松本．近野、練間菅沼
倉地．泉．長谷川千葉．
佐藤．小林(以上19名)
◐-富士見平-大日小屋-小休-山
-山頂-小休-大日小屋-富士見平-◐
◎テントキーパー．原．鈴木．金子
天羽、江成．大用．朝食後前場下山。
倉地は現役．神川合宿中止のため
そのまま金峰まで来る。夜フィヤー。
(就寝 24:00)

5月6日 快晴 (7:30起床)

山頂．大用．江成、松本、大房．小林
井上(京)近野佐藤車で下山。新津
菅沼．泉．井上(京富)下山。
昼頃　その他　下山。

五月合宿

泉 篤志

五月合宿、それは新入OBにとって、期待と恐怖のいりまじった山行である。さて、1973年の五月合宿は奥秩父方面と決まり、富士見平にベースをおいての山行と決定した。

5月3日、朝はえいのに何で起きなあかんねえんだ」とぶつぶついいながら起きた私は、眠ほけたままで山のかっこうをして、ねぼけたままで家を出た。さて、私が夢からさめたのは、自分の背中にただならぬ重さを感じた時だった。あたりを見まわすと山のかっこうをした世にも恐ろしき人々と思いきや、我OB会の面々であった。所はというと増富からベース地へ向う林道であった。我々は例のとおり、テンタラ歩いて目的地のちょっと下のテント場にベースをおくことにした。我々はさっそく S.W.V. O.B会御一同様専用テント場と書いてある所を捜した。だがしかし不思議といおうかあたりまえといおうかそんなものはどこにもないので、その辺の所にかってにみすぼらしくテントを張った。そして、その日は瑞牆へ行くタフといおうか、強(狂)人といおうか、私たち人たちと、テニ張った食事のしたくをするしおらしい謙虚で気高い人たちとの二つに分れた。私はもちろんテント場に残った。後はおぼろ……。

時は流れて夕食時 我の残留部隊は、早く出来すぎてしまったスパゲッティーに「悪い子、メッメッ」といいながら山に行った人のことなどまるで忘れたかのように、がっついた。そして、残りをさも多く見せるようにしておいた。あとはおぼろ……。

時は流れて初めての夜 魔の夜である。うぶな私にお酒などという魔の液体を飲ませ幻想の世界へと私をいざなった。テントに帰ってからは、千葉さん、練間さん、長谷川さんのただいま恋愛中の実況放送を聞かされた。外には数えきれないほどのお星様がきらめき、薄らと白樺林を映したし、センチメンタルな僕の心をくすぐり、涙をさそった。かくして第1日は終った。

時は流れて2日目の朝である。この日は小川山に行く人と瑞牆へ行く人と二つに分れた。私はどういうわけか瑞牆であった。たかだかその方しか知らないが、後で聞いた話によると、小川山へ行った人たちは、なんでも水晶に目がくらみ醜い争をくりひろげたとか、そういえば、皆んなの顔が変にゆがんでいた。それにひきかえ、瑞牆コースの人たちは知的というか、育ちというか、「ばか」と「アホ」の違いについて討論しながら登った。どういう訳か「アホ」を絶賛する人が1人いた。頂上からの左がめはすばらしく、全員で皇居の方を仰ぎみて、天皇陛下万才を三唱して、君が代を歌った。佐藤さんがバルナック艦隊だの東郷さんがどうしただの話をしてくれた。長谷川さんなどは、黒船の話をしてくれた。長く生きている人はどこか違うなあと感心した。あとは おぼろ…

時は流れて二日目の夜。初めての夜とちがって だいぶ慣れた私はコップ酒を2～3杯あおった。しかしやはり、魔の液体である。色白の私の顔をほんのり桜色に変え眠気を誘った。恐ろしきはコンスケ嬢。コップ酒を1杯。また1杯と顔色ひとつ変えずにあおっていた。その夜は、後発隊の人たちが着いた。懐しさのあまりとびつこうとしたが、レイコ嬢の鋭いエラに恐れをなして止めた。その夜、宴会はとどまるところを知らぬかのように続いた。私はシュラフの中でみんなのお化けの話を聞いて、住んでいる世界を疑いながらも、お空のお星様に「おやすみなさい」をして安らかな 眠りにおちた。あとはおぼろ…。

時は流れて、三日目の朝、この日はみんなで金峰へ行くことになっていたのでチンタラと出発。登って行く途中、新津君は何度となく女の子に間違えられた。新津君が立ち○。○(映倫カット)をしていたら目をたくしていた。不思議なことに私は一度も間違えられなかった。ひ弱な体にムチ打って第四コーナーのカーブを過ぎて、かすかに雪を残した頂上に着いた。ここから

の夜がめは最高だった．北は北海道、南は九州．沖縄まで、一望のもとに見わたせた。と日記には書いておいた。

頂上で昼食を済ましくがっついていたら．どこかで見たような、一見、高倉健を思わせる顔つきが．我々に近づいて来た。何んと、誰あろう、倉は倉でも倉地さんだ。た。（倉地さん、お　　おくれ）．なんとタフな人だ。さっそく残り物のパンやチーズをほうばり、喉をねぎらった。あとは　おぼろ……。

時は流れて．その日の夕食も済みみんなでバちゃべちゃ話をしていると．急に江成くんが私に「食器を洗おうぜ」と近くに流れている小川へと誘った。　私は江成君という人を誤解していたと心の中で涙を流してお伴した。さて．小川に着くと江成君は無造作に食器を水の中へ投げ込み「たのむな，オレだめなんだこういうの」とまたも無造作に言った。私はさっきの心の中で流した涙をスポイトで吸いあげ乾燥剤を入れた。そして汚れを知らぬ白魚のような手を氷のように冷たい小川の中へと捧げた。その夜は最後の夜とあって．よもやま話に花が咲き、そして枯れた。私はこの世．世にもめずらしい歌の数々を博学の先輩たちより授け賜った。楽しい時は川の流れのように過ぎ去り　いよいよ　キャンプ地をあとにする朝が来た。　いやもう昼に近かった。　みんなで名残り惜しそうに自棒材に目をやりながらアーメン　いや　ソーメンをすすっていた。　そして食べ物がなくなると．みんな　蜘蛛の子を散らしたように去っていった。華麗にして．かつ千品．いや上品でこれぞS.W.V.O.B会の山行だという素ばらしい山行だった。

「かりも方便」私の好きな言葉です。津久井の城山にお住まいの　泉さんも　ママレモンの御愛用の1人です。では　みなさん　また　私がペンを執る日まで。

さようなら．

あらあらかしこ。

夏合宿

場所　南アルプス 白峰三山

日時　1973年 7月27日(金)～7月31日(火)

MEMBER　佐藤千秋 〔CL〕〔景徳〕
　　新津正己 〔SL〕〔食糧〕〔記録〕
　　井上京子 〔装備〕〔薬品〕

《実動コース》

27日～28日

八王子═══甲府═══身延 ═══奈良田 ═══幌掛所═
　　═══大門沢小屋⛺

★吊り橋は丈夫らつ、大門沢小屋が見えてから遠く感じた

29日

大門沢小屋 ═══════ 広河内分岐⛺

★河原をついに最後の水場をすぎてあとは樹林帯

30日

広河内分岐 ═══農鳥岳 ═══西農鳥岳 ═══════
═ 農鳥小屋 ═ 間ノ岳 ═══ 旧北岳小屋⛺

★稜線(肩の小屋)から旧北岳小屋までが急下降
テント場は少ないが水場は豊富

31日

旧北岳小屋 ═ 稜線 ═ 北岳 ═ 肩の小屋 ═ 大樺沢
二俣 ═ 広河原 ═══ 甲府 ═══ 八王子

★北岳の登りは急傾斜の長めつこい登りである。大樺沢への分岐は白根御池小屋をいったん下って少しいったところにある

雨にぬれても..

―幸下合宿小行記―

新津正己

―青春の光と影―

霧が流れてくらか寒日がさしてきた。三人は黙って互いの瞳の奥をみつめあっていた。白頭があつく日るのを感じあい そこに光るものを私は見た。目を閉じると今までの事が走馬燈のようにぐるぐると様々な影を投げかけてくる。瞼の内でいっぱいに日っているものを見られるのがはずかしくてあけられないが、重ねあった手から血潮の脈打つ暖かさを感じていた。標高3,192メートルの地にたって――。

―天使の詩―

田んぼ道を、民家の屋根を照らしている光が私たちの列車の窓辺にもあふれんばかりの暖かさを提供してくれた。身延の朝はひきしまった空気の中にまぶしい陽ざしが浅間もさしこんで快適であった。

バスは奈良田へと向った。身延の町を右往左往しながら、いつしか農家の軒を通り過ぎるまでとなっていた。どこの停留所だったか、名前をかいたハンケチを胸にさげ、ランドセルを背負った園児たちが乗り込んできた。登山者には慣れているのか それでもたくさんの汚れない瞳が私たちを見つめている。運転手が低い重厚な声で窓にそれを知らせた時、何とも言えない"おはかいします"という美しい7つの音が耳からはいり込んで来た。あのかわいい口をそろえていたのである。園児が降りたバスの中には天使の詩がひびきわたっている。登山客だけとなり、終点まで乗っていたのは私たち3人だけであった。

木漏れ陽はバスの床を流れ、路肩の枝は窓をつつき、林道のはるか下の谷川の流れはかすかに、バスのあけるほこりと騒音が"いいねあ"と感じたのは前代未聞のことである。

―太陽がいっぱい―

奈良田は陽に焼けた下山者で賑っていた。これから登るのは我々三人だ

けであった。パックを仕直し、登山口へと向い、発電所の脇の土産屋で登山者名簿にサインして南アへの一歩を踏み込んだ。吊り橋をいくつも渡り大門沢小屋へと足を向けた。

★★ランチが実に美味しかったので献立を紹介しまーす

◦フルーツパン(パイレックス)
プラム、ソーセージ、チーズ、トマト、カルピス

沢の音を右に聞き、左に聞き、熊笹の道を登ったり、降りたりコンパスを出して〝ネェ〜もう見えてもいいんじゃない〟〝ホント、でも、まだまだじゃあない〟なあんて半分あきらめ、半分ヤケに成って歩いたのです。それにしてもこの荷物30キロ以上ほんて現役時代以来初めてです。足はつるし、暑はいにいし、これから先どうなることかや…

★★㊙実話 その1(小休止)

——そろそろ荷物背負って!

——あ〜、また歩くのか。よいしょっと

——ホラ、手かしてやるよ

——ありがとう! よいしょっと…

(空間)…あれっ? はずれちゃった。あ〜〜〜ん。

——何があ〜。あ〜。

——ホラ、先に行って!

(男の為、理解できず)

あれから何時間歩いたにろうかいくら辛抱強い私でもいいかげんいやになった頃、遠かい山の中腹にあのテントのオレンジ色が眼にとまったのです。〝ウァー見えたあ〟と叫んでしまったのです。あそこまで、あそこまでと何度も強く言い聞かせました。ところが、ところがあんまりです(涙)。そのオレンジ色たるや、名も知らぬ樹木の葉の色なのです。真赤に紅葉ほんて、他よりめだとうと思って、バカバカ、宗のバカ(←おなべでほいがし的し、既に○○の形容詞として日本中で使用)あんまりでいやると嫌かれるよ。何お前もだ。スミマセン。

——お陽さまだって低くなって来ました。風だって吹いてきました。目のに大門沢小屋は見えず。ボケーとして歩いていた時一匹の虫がバイカルの美しさに見とれ私の膝ほど

りにとまったいてす。刺されては困ると、顔を振り仰いだ時、何かを見たのです。空を向いたまま何を見たのか考えました。――煙です。大門沢小屋の。120度見あげた頭を90度もどすとそこには小屋があったのです。二人をあとに私は先に乗り込み、テント場と料金の交渉をして二人を待ったのです。夜のとばりもおりて三人は 手間の中、テント、炊事場、きじ場へとせわしく足を運び、やがてシュラフに包まれて、可愛らしい寝顔へと顔は変えていったのです。

―― 火の森 ――――――――――

テントから直い出ると細糸のような霧雨が絶えも重たそう待空から垂れていた。霧雨の中の大門沢小屋をあとに歩き出した。小屋のおじさんが天気は大丈夫といったのに、歩いて一時間もしないうちに雨のみに与ったのです。私は雨男、水も滴る云云とからで覚悟はできてしまった。でも昨晩は10時まで起きては天図日とるべきだったのです。今となってはあとの祭、私たちは歩き続けました。白峰の逆コースをとっている為、お会う人はいても一緒に向う人はいないのです。雨は相変わらずどころか、ますます本降りに与って来るのです。登りもー番きつい所に与りました。疲労の為キーコがフラフラしだしたのもご ん 与頂でした。出合う人も"稜線まではまだまだ歩き甲斐がありまっせ。"なんてニッコリ笑って言うのです。あれ程きつい言葉はあるでしょうか。この針林帯 雨にと降っていたけれどまるで火の森 そのものでした。

――明日に向って撃て――――

何度も言う通り小休止をとっても稜線はでません。私が先頭に立つと私の独立心と向上心が架空の道をつくってしまい獣道へはいってしまったのです。まだ玄関ぐらいで止に気がついたからよかったけれど、水、きたまに台所、奥座敷へとあがり込んでいたら帰って来れはなかったかも ….。三人とも裸同然

でウォーウォー叫んでいたかもネ（もちろん一番サマにほめのはテアキさんだが）。誤って道を戻ることほどバカバカしい事はありません。そんな事がいっさいキーコを疲れさせてしまったのです。稜線へあと一歩（今だからわかっている）というところで荷物をおろして三人と荷物二つはもう一歩というところまで登りました。そこでキーコを休ませ、テアキさんは荷物をとりに下り、私は稜線を頂いに登ったのです。再び三人はキーコの待つところに集まり、荷物をひとつ残して稜線に向いました。風も強さを増して来ました。

稜線の分岐で農鳥から来た人にテントの張れる場所は何いかと尋ねたら、こんな所に長居する奴があるかと怒鳴られました。どんな事我々にだってわかっているのです。でも一歩だって先に進めなかったのです。上から下まで、外から内までびっしょりなんです。テアキさんが荷物をとりに戻ったあいだ、私は手足五本、いや四本をフルに使って分岐を通り越した窪地にテントを設営しました。キーコを着替えさせ（…といっても手伝ったわけではない）分岐までテアキさんを迎えに行きました。霧と雨のため視界がきかずその上強風、疲労した人の霊を祈ってにてに鏡のヒモをひきちぎれるほどの思いで"テアキさーん"（亀水まじり）って何度も叫びました。風は意地悪く私の声をかき消し、霧は私以外の物体を視界に葬ってしまうのです。叫びつかれて一瞬不安が押し寄せ、前進が硬直して、体を起こしかけた時、人影が数メートル先にみえたのです。私は一目散に影の方へとんでいきました。びっしょり濡れたテアキさんの顔がほほえみかけてくれました。テントへ転げるようにはいりびみ衣類をかわかし、温め合をとったのです。目をつむるとラジオとボス(?)の音が外の音と戦っていました。ラジオによると悪低が元気を取り戻し、日高脇岳地帯の雨雲は消えるような気配は無いとの

ことです。

外に出てみました。風は相変らず私のほほを叩き、豪雨は肌を刺しました。テントのひもを直して周りを見回しました。夏場だというのに周りは薄暗く、霧ばかりで地獄の絵図のようでした。私の心の中を映し出している様でもあり、明日からの私たちの道を案じている様でもあったのです。明日に向って私はキヅを整えたのです。風に打ちひしがれて左手で描いた様な不格好な孤を大きくかきました。あたたかいものを出して損をしてしまったと思い、湯気のたつ石を思いきり蹴とばしました。

＝＝華麗なる賭＝＝＝＝＝＝＝＝

アスの音が気持ち悪いくらい共鳴していました。寝袋から、それぞれ這い出し朝食の準備を急いだ。天気予報を聞いて、大門沢へ戻るべきか、それとも進むべきか討論した結論のすむことに決定！豪雨と風の中でテントを収収して不安定ながらも鹿島へ向った。雨に濡れた高山植物に励まされながら、私たちは稜線を北へ進んだ。三人皆元気。雨具も今では役に立たず、体の芯まで濡れて気持ち悪いことこの上ない。

女(笑)史話その二(移動歩行中)

―ネェ見て鳥がいるよ。やけに太っていると思わない。

―アホ好。

―ホント、腹が出ているみたい

　あの鳥名ほた、何ていうのかな～。

―……。

―ドモウ鳥っていうんだョ。

―いいや、コジマ鳥だ。

―あー 言いつけてやろう。

雨の中の討論会(?)は続きました。鳥をみて誰か優しい人に出逢ったようで心弾くものがありました。冷たい岩肌にもたれかかったり、豪雨に泥することもあるつらい山道なのに私たち三人は転げ回る程笑いあうことがたびたびあったのです。

鷲鳥・西股鳥と過ぎ、霧の中に鹿島小屋の屋根を見た時、とんでいって小屋のおじさんに抱きつい

てほおずりでもしたい気持ちでした。小屋の茶のほかに、関西弁を使う人に紅茶をいただき、フルーツパンと水羊羹とダレープフルーツで昼食とする。美女（多少抵抗はあるが）と山行を共にすると得である。濡れたものを再び身にまとい、他の登山客がビックリする程大きな荷物を背負って、雨粒で美しい虹の中を聞い岳へと向った。中白根への途中でふと前を横切るものがあった。雷鳥である。親のあとをちょこちょこついて歩いたり、飛翔の練習をしていた。私たちは道の傍らで、その光景に魅せられていた。聞い岳中白根は意外に長かった。中白根を通り過ぎ、北岳稜線小屋を過ぎ、急降下して旧北岳小屋にテン泊した。テアキさんの寝袋などは持ちあげたら水がザバーッと流れ出し手品のようであった。仕方なく、彼女はツェルトにくるまって一夜いや半夜を過した。夜中に震えているのである。ズズをつけて、歯をガタガタやって、じっと我慢の子であった。

＝＝＝＝傷だらけの天使＝＝＝＝＝

東の空が明るかった。暗い山々のずっと上に富士が浮かんでいた。雲はサーモンピンクに染まり、幾筋もの光が雲の間より地上に注がれていた。最終日にして太陽と感れる…なあんて思いながら陽だまりで食事をとった。誰かさんほんてお粥を食べながら己の下痢の話ばかしているのです。

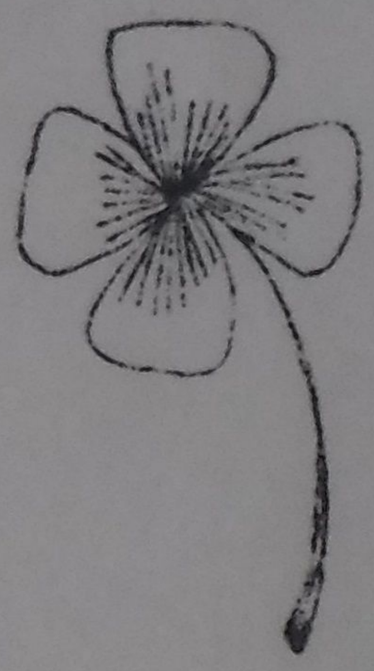
とこうが、とこさがですョ、また霧が出て来たのです。稜線に達する頃には前日と変らぬ空模様。北岳の登りはきつかった。西側から吹きあげる霧とも雨ともつかぬものが体を振り回し、キーコほんとは宇宙遊泳さながらの気分を味わったにちがいない。風は容赦なく吹きつけ、私は二人の風の抵抗をまったく受けけない鳥がうらやましかった。悪天候であってもさすが頂上は賑っていた。晴れていれば甲斐駒をはじめ多くの峰々を一望できたのに残念です。

流れ着

北岳、肩の小屋での対面はこの上ないものでした。お茶を向うのまちがいで夕ってくれた事がきっかけで焼きトウモロコシはくれるし、スモモは出るし、その上来年アルバイトに来いとまでいうのです。いただいた餅で作ったおしるこ粉を一緒に食べ楽しいひとときを過しました。小屋の人の言う通り、2.3日ゆっくりしても良かったのですが、在郷に居るみんなもこの天候だから心配しているでしょうし、例え三人であっても合宿なのです。気持ちをおさえて、小小屋の扉をあけ霧の中へと吹い込まれていったのです。小小屋のおにいさんの黒い瞳がガラス細工のようにきれいだったのを覚えています。あれでオイラを女と誤えなかったら……。



大樺沢の下りは実にいやなのです。泥の中を七転八倒しながら下へ下へと降りました。周に光る植物の名前を千アキさんにおそわりほがら、千アキさん、オイラキコの三人は白峰の稜線からしだいに足を遠のいていったのです。高度が低くなると共に雨は大粒となりびっしょりではあったが風は無く気持ちよかった。荷物は水を吸って重いし、一歩一歩降りるたびに肩と腰にくるのです。



長い、ホントに長ーい大樺沢もおわり、林道にでると二人のLADYはスピードアップしオイラは独りぼっちと後をふてくされて歩いていたのです。木立ちの中小石河原のバス停でバスを待ち、やがてバスの一番前の席を陣どりバスは夜叉神峠を通り甲府に向います

栄光のル・マン

列車は我が家に向います。背負子。園児。タレ下のフルーツ。雨。鐘。電気。フルーツパン

流。暴。テント。雨具。ラジオ。
ヒーマン。たくあん。羊羹。トウモロコシ。 etc.... 。
窓の外の景色のように頭の中をいろんな事が通りすぎます。車輪と線路が醸しだすリズムにあわせて二人の寝息が聞こえます。

ガタン・ゴトン　ガタン・ゴトン――― 私は独りガラスに映る歪んだ顔をみつめています。

――おわり――

＊　＊　＊　＊　＊

奥相模湖キャンプ

場所　奥相模湖キャンプ場　☎0427(88)63オツ乙

日時　1973年 8月17・18・19日

8がつ17にち はれ

12:00 車は昼過ぎにキャンプの村に着いた／荷物をおろし石の上をピョンピョン跳んで川向うのバンガローまで／鍋、まな板、そして電気釜／おたまもコトコトうれしそう／バスで来た人もそろってランチ。

14:00 はやくもパンツをはいて水の中で遊んでいる奴がいる／水は冷たそう／おひさまもにっこり。

19:00 夕食もおわって、みんなで花火大会／暗にきれいは花がさく／今夜はホタルも木の葉の影。

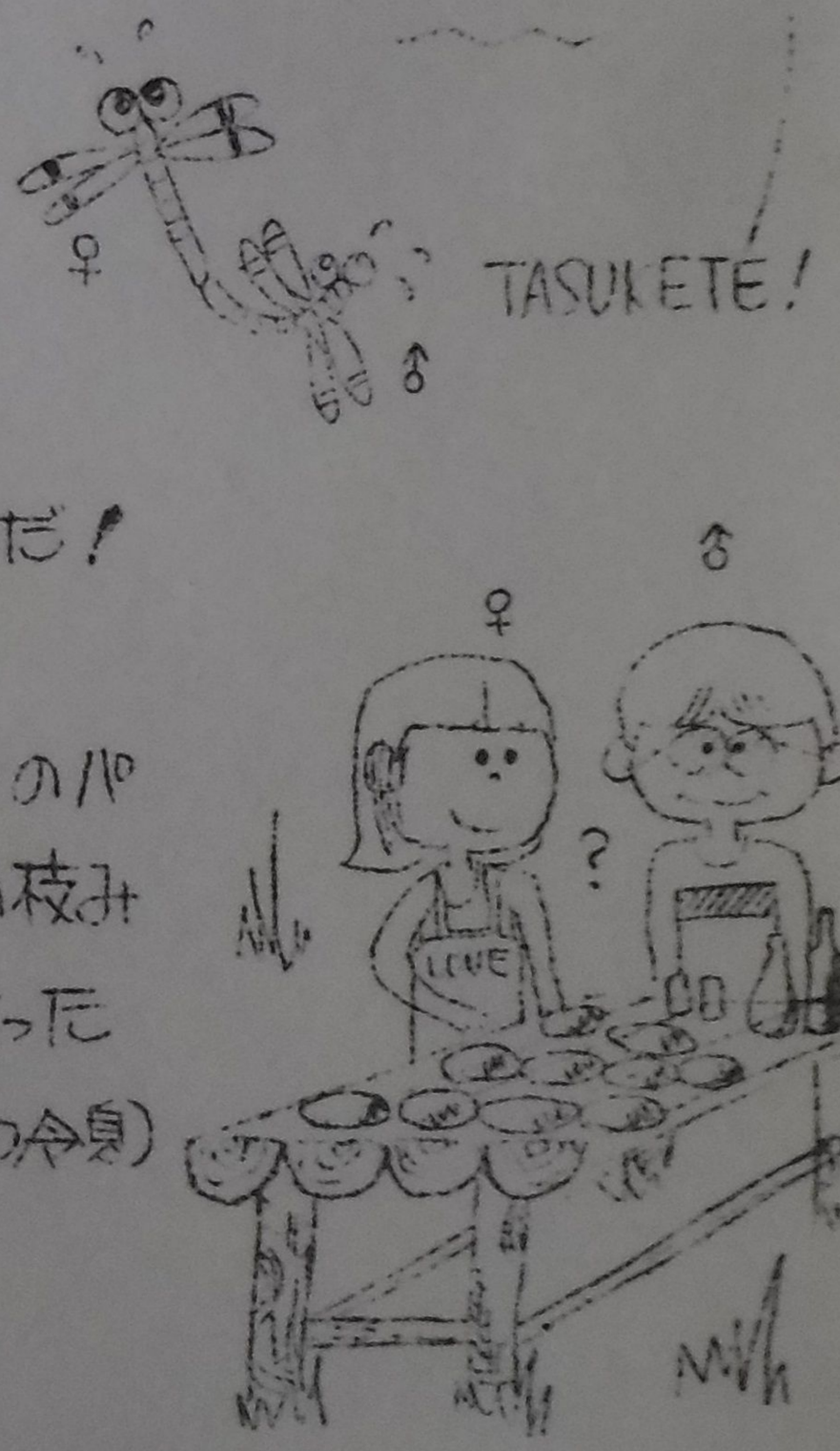


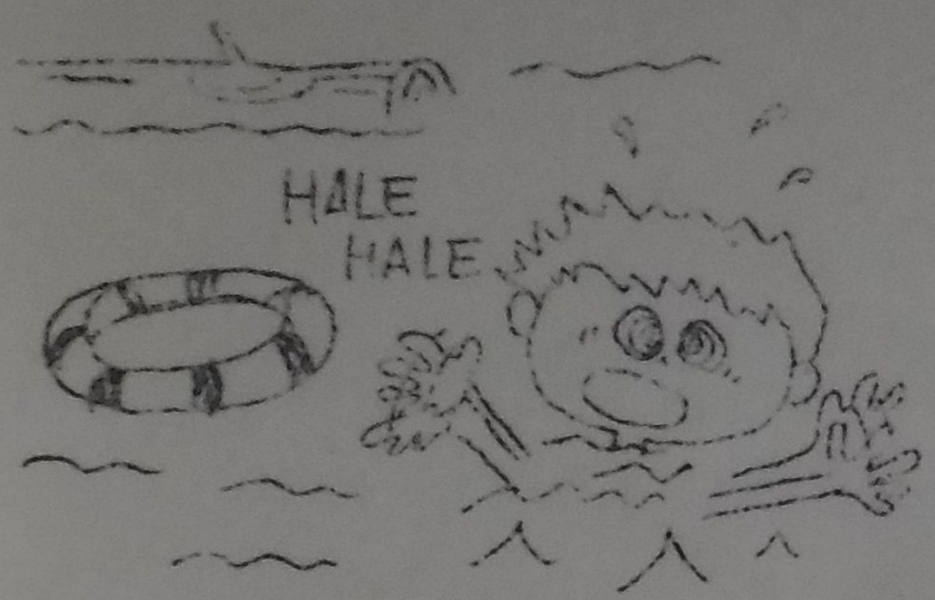
8がつ18にち はれ

7:00 イチ、ニイ、サン、ツー。
イチ、ニイ、サン、ツー。
ラジオ体操／ねぼけまなこ／誰だ！まだ寝ていまかは…。

9:00 赤・青・黄・花模様(?) 色とりどりのパンツがもぐったり うかんだり／木の枝みたいな足が水をける／童心にかえったカッパたち／マー坊(入江先生御令息)も千葉氏を家来におおはしゃぎ。

12:00 今日のランチは…？
生存競争のあさましさ／ 戦後 30年が
たとうとしているのに。（↗ 次の頁に…）





15:00 演劇"水の中の小さな太陽,,/主演 大房利男/監督.スタッフ SWV OB/座長さん曰く.リアルでしたネェ~ あの顔.あの声 すばらしいですネェ~.それでは サヨナラ.サヨナラ.サヨナラ。



20:00 夕食のあとは 江成君とりしきるキャンプファイヤー/川面に.対岸の岩にいろんな影を投げかけて/ジョルジュの油絵でもみているみたい。



25:00 河原でバンがロで男は絶えない/酒はうまい/邦チャンお得意 ㊙日舞。

8がつ19にち



7:00 皇.コングの号令で起きたせず体操 河原がみちこっちをゴロゴロ/石にへばりついたり花ばこんだりして寝ている/バンがロ-ほんぱ組。

9:00 今日が最後とばかり/お肌の曲がり角を気にしつつ スワベさんも 大用さんも若い!若い!/天用さんほんぎは見事な浮き袋(えっ オナカだって ウソオ)

12:00 皆さん.関本氏ほど無視してトンズラ/渡辺人小義理がなくほりましたねあ~ 村は静か/夏のおわりの風がバンがロの軒を.かまどの脇を通り抜けていく。

交歓会

木村 稔

今回のOB・現役の交歓会は、あいにくの雨だったせいか互いに集まりが悪かった。晴れたら外でサッカー、ソフトボールなど予定していたが、このため変更となり体育館でバレーボールと卓球をすることになった。

全体として盛りあがりがなく、OBと現役(特に一年生)とのへだたりを感じた。実際、僕にも初対面の人が多かったように思う。

これからは、O・Bと現役の接触する大きな機械である交換会の回数をふやした方がよいと思う。

いつ: 1973年11月23日
どこ: 相模原高校
やったこと: バレーボール
卓球

忘年会

嶋崎三郎

12月8日、9日と忘年会は昨年に続き、西湖パノラマウントパークにて行なわれましたが、役員の準備不足、連絡不足などの不手際があり、参加した会員の方に大変御迷惑をおかけしました。

「いつ: 1973.12.89
どこ: 西湖パノラマウントパーク
きたひと: おおぜい」

また、それにもかかわらず、忘年会実行のためにいろいろ働いて下さった方々に御礼申しあげます。

富士山周辺ワンデリング

5月 19・20日

1仏峠コース
2金時山コース
3七附峠コース

6月 16・17日

1三国山コース
2愛鷹山コース

11月 2・3・4日

1天子山地コース

12月 15・16日

1白糸の滝コース

富士山麓のワンデリングも三回目を迎え、ついにその全行程を完了しました。

雨に降られながら、マメを潰しながら歩いたこともありました。もけがもなく振り返ってみるとそれぞれがひとつのワンデリングに深い思い出があるとおもいます。ただただ美しい山だけがすばらしいのではないということも、身をもって知らされたこともあると思うのです。

しかし、まったく富士の外輪山に、O.F.会の足跡を残したのです。富士山を中心に一まわりするほどの長い距離です。

さいごに、富士山に登る打上げ登山が、計画されているとかことです。今一度、5年一貫のワンデリングを振りかえってみようではありませんか。

—山崎三郎—

【第12回】 〈1コース〉

日時　S.48年5月19・20日

天候　くもりのちはれ

コース　精進湖――三方分山――精進峠――パノラマ台――本栖湖

精進湖――根本

メンバー　大田和也・泉、浩志

松本純子・近野尚子

コースの状況

松峰ハイキング斜・登り

こっに分かれている。

今回は、車を使って精進湖まで、アプローチし、そこからスタートして山に登ろうという計画であった。車であるために、何でも積み込めるし、明朝早起きしなくてすむので、案外、楽で夜中もなかなかと、豊富であった。夜の10時頃に出発し、日と片手に夜の街を走り続けた。寝袋予定どおり御殿場の廃校に着いたのは夜半の2時頃であった。軽い食事を済ませてから、ねむのすこし様にな、たのだが、それっきりの寝で、朝の6時頃から全然眠れなかった

松本純子さん、て、コッフェルをたたいて谷を起こしてしまった。しかし実際におきだしたのは、一時間程たってからである。そして、おそい朝食をとり、精進湖の登り口へと向った。歩き出してからは、よく寝た二人は快調、眠りなかった二人は、不調と言がでてしまひ、眠れなかった大田和さんが楽しめとして好いだしたりした。また、春たけなわと草木が芽たくさん若葉をつけて道にせりだしていたので、その葉と木の枝をはけるのに、皆が新緑りしたかで、方針をのんびり決めるにした。しかし、あまりのんびりしすぎて、予定の6時まで行きつかずに精進峠かなし先まで下ってしまった。その後、2組に分かれて精進峠の行き間所まで競走など(両組とも親切なおじさまの車に乗せてもらえて結局はしなかった。)しながら、無事に車へ荷物を作りつけ、元気よく帰ってこられた。全体として、とても優雅にのんびりとした山行だった。

この次の、B、反の山行が、と改めて記載させられました。―近野尚子―

【第12回】〈3コース〉

日時　S.48年5月20日(日)

コース　相模原…原町田…新松田…松田…駿河小山…明神峠…湯船山　分岐点（ここで道に迷い2度ばかり往復）…鍋割峠…塔ノ岳…尺を下る…駿河小山

天候　晴れ

メンバー　木村稔・山田隆一

紀行文

木村稔・山田隆

厚木のバスターミナルのはじに、水道と登山案内図があったので、ここで水を飲みためして　ポリタンも満タンにして案内図で道をたしかめてから歩きだした。本来なら、ここから明神峠まではバスで行く予定であったが、我々のミスで歩いて行くことになった。

やがてしばらく町の中を歩いているとやがて道に勾配がついてきた。しかし　まだ人家は絶えない。

人の通りも多く　休日であることここが　元来、日帰りのハイキングコースであることほどのせいか、ハイカーやサイクリストたちの姿も少くない。空はすでに晴れであった。前日あたりに、わるくずついていたので　雨のふらないことを祈りつつの山行かとも思われたが、まさかこれほど晴れるとは思わなかった。しばらく行くと道が二つに分かれた所へ来た。どちらへ行ったらよいものかわかりかねたので　地元の人らしい人にたずねた。その人は、大変親切な人でおおまかにくわしいところまで教えてくれた。

右手に折り　右の道に進むとやや平坦になりつけていた道がまた登りとなった。しかし、この道は　まだ新しい舗装道路で、さっきの人の話によるとこの上に団地があるという。なるほど少かてその団地らしきものがお見えてきた。この団地の前まで来るとやや勾配は　ゆるやかになり、山の斜面に対し、垂直に走る道路となる。こんな道をダラダラ行くと、やがてしばらくして、下り坂となり、

右手に発電所が見えてくる。この発電所を通過すると、また少しばらくして上野という所へ着く。ここで右に曲る。この少し前から道は、舗装でなくなっていて、ジャリ道になる。左側も次第にきつくなり、山へ登るという感じがつよくなる。そこから少し登った所で、休けいをとった。

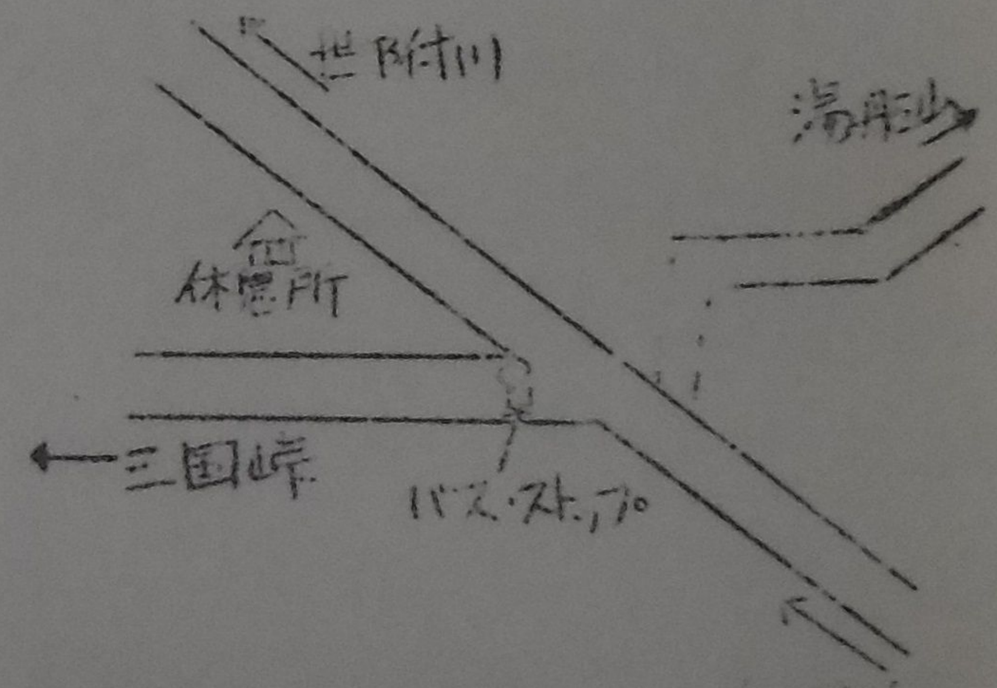
我次が休んだ所から道はジャリ道でなくなる。土の道である。道幅も、狭くなり、両側は木立に被われている。この辺からであろうか。左手に見える山の向こう側から、大きな力強い音が響いてくる。やがて左手の景色がひらける所まで参ってくると、その正体が判明した。なんと、そこにあったのは、十勝名物「帯広スピードウェイ」である。当日は別に大レースがあるようには思われなかったが、それでも何台かのマシンが疾走していた。あとで気がついたことだが、この音は我々のコースを歩いている限り、必ず聞えているのである。

そこから程なくして明神峠についた。

明神峠→七附峠(?)

この明神峠から道が二つに分かれる。進行方向に対し、やや戻るような感じで高い所にあるのが、これから我々が向かう道であり、ほぼ真直に続いているのが、三国峠へ行く道で、やや右へ下る道は七附に出る道である。この三国峠へ行く道と七附に出る道のあいだに、小さくもりあがった所があり、その上に赤い屋根の休憩所がある。この休憩所で我々は、休けいと昼食をとった。

そこを出たのは、12時15分であった。予定よりかなりおくれた出発ながらもしかしやがおうにも早く歩ませた。明神峠から湯殿山へ向かう道は、気をつけないと見つからない。(下図参照)



2つに分かれた林道は、この際、関係がなく休憩所のある登りあがった所の反対側にある。もりあがりの上にあがると、幅3m程の道があるから、そこを行くのである。

この林は尾根うたいの道で、はじめは極めてゆるやかな登り、もしくは、本当に平坦な道であるのでかなりとばすことができる。そのうち、急なのぼりとなる。そして、やや下って又、急なのぼりを登りきるとそこが猪垣山である。昨神峠から猪垣山まで本来なら40分かかるであるが、かなりとばしたせいか、25分程で来てしまった。猪垣山を出て15分すると分岐点にくる。別にこれといった標識はない。一応、両方の道を少しづつ行ってみた所、左へ行くのが正解であった。ここは、初めて来る人はもちろん、よく知っている人でも間違えやすい所である。ここからは、はじめ、急激な下りとなるが5分もおりないうちになだらかになる。ここからは気分のいい道で快適なペースなのである。景色は、右手に尾根がうねり右手に杉の林といった感じである。

20分くらいで出発地点という所へついた。本当なら30分から40分の道のりであるようだが、ますそんなにはかかりそうもない。ここには、木に似せて作ったコンクリートのイスとテーブルがあり、またテント場らしい草をきりたおした所もあった。またここから法河原というところへつづく道が約1m巾にのびていた。ここを出て10分程で標識のある所へ来た。そこには御陽まで100分と書かれてあった。そこで我々はその方向へむかった。ここちがである。5分も行かぬうちに道がなくなっているのである。どうもくずれたらしい。すぐ下に段になったような林道とつながってしまっている。すなわちそれ以上先へは行けないのである。そしてまた、この道は地図にない道であった。はじめあたりを歩きまわってみたが世附峠らしきところは全然見あたらず、あげくのはてで日没もせまって来たので我々はあきらめてこの林道を下ることにした。ところがこの林道はいくら下ってもいっこうに下界へつかないのである。ここで

紀行文

小林 けるみ

このコースは、初めの計画では、裾野から登り十里木に下る予定であったが出発の当日急に車を使っていただけることになり逆コースをとった。このコースのいちばんの難点は池ノ平を通らず現在の地図にはのっていない獣物から防火へのコースをとったことにある。地図にはっきりわからないコースを走ることは精神的にも重荷であったし、ここにあまり時間をとると予定通りのコースをあけたい心配もあった。車で十里木まで行かれたことによって近コースにして愛鷹から裾野に下るコースをとることができたのは結果的にたいへんよかったと思う。

17日は、朝は富士山が見えていたがすぐガスがかかり始め時々うすく重くるしい天候で小雨も時々あった。草木からうっそうとした道のため風がひどくみんなでしょぬれになってしまった。

呼子岳までは順調なペースで行た

思いあまった我々は沢に出たとき、そこを下ろうと決意した。この沢下りが正解であったか不正解であったかは微妙なところであるがなんとか暗くなりかけた頃下界へ着くことができた。

【第14回 1コース】

日 時：昭和46年6月17日(日)

天 候：くもりのち雨

コース：新原部落――新根岸寺――池ノ平登山口――桃源台――深良水門――須走峠――三国山――裾野――松田――新松田――新屋町田

メンバー　山口孝次，土上京子

【第14回 2コース】

日 時：6月16日～17日

コース：相模原――陸上自衛隊(株)――通称北富士――呼子岳――箱根――通過終了――仙石岳――下ノ茶ノ分岐――池ノ平分岐(道すがら)――裾野駅

〔第17回〕

場所：天子山地

日時：昭和45年11月23.4日

天候：2日 はれ
3日 くもり時々雨
4日 はれ

メンバー：倉地哲朗、大房利男

ユース：

(2日) 相模原——八王子——大月
富士吉田
(泊)

(3日) 本栖湖——ボトル峠——小尾根——三伏峠——
小屋——小休——小休——
南ア岳——ピーク1921(泊)

(4日) P.1921——P.1959——毛無山
——北蔵峠——下吉峠
——P.1575——滝水峠
——長者ケ岳——天子ケ岳
——白糸の滝——富士宮駅
——富士駅——小泉原
——新原町田——相模
原

外輪山道路はあんまりすべりやすく
ほんのちょっとした不注意が万直を
まねく天でしまったりして、思わぬ
時間がかかってしまった。初心者
平均地点も標高に下る道がはっきり
としないため道さがし1.30分ほど
とったがその道にはいってからは、
想像していたよりもやどいやぶこぎ
でなく地図を主体しながら下った。

着いたところは須津というところ
で電車がわに下ってしまわないよう
に心配しすぎた結果、予定よりかなり
ずれてしまったが、縦断隊にも予
定の時刻につくことができた。

個人的な感想としては鞍部のよう
な山に行ったことがなく、はじめて
登、たのようなところはとてもよ
い経験になった。

富士山一周の計画がだんだん終り
に近づいてきたがその何分の一かで
も自分で歩いてみることは、とても
うれしい気がする。

執筆した人：倉地哲朗
大房利男
小林はるみ

紀行文

大房利男

前回下山したボート乗場までは、すぐに見つかったが、そこから今尾根に出る道がなかなか見つからず、水を入れにりして15分ばかりたってしまった。ようやく見つけた道を進むとすぐに尾根に出た。仙峰までは荒れてはいるがちゃんとした道がついていた。尾根に出た所に前に縦走の中の一人が後から来たので仙峰までの道中、天気や景色などの様子をきいてみた。それによると一度歩いたことがあるがほとんど人の歩いた跡はなく、やはりすごいということであった。仙峰で縦走隊と分かれて我々は少々早い昼食をとることにした。朝からどんよりした空からぽつりぽつりと雨粒がおちてはいたが、今はもうやんでいる。だが以前よりも空もだうは悪くなるばかりである。朝はまだ一日あるので今日は様子を見ながら歩けるところまで歩くことにする。ここから浦ヶ岳までの道はかすかな踏跡しかなかったが2.5分程度尾根の右側を歩けば、まず迷うことはないと思う。それも今回みたいに視界のきかない時であれば大変だが晴れていればそれほど困難なしと思う。

だが最初の前ヶ岳まで行けばあとは困難なしだろうという考えはまちがっていた。ここからP.1921までは一面のササで3分位歩いてはいくらも進むことはできなかった。しかし、くずかっていた天気もようやく上がり、富士も夕日に赤く染まっていた。暗くなるのようやくP.1921につき、ツエルトを張れるスペースを見いだしたときは、うれしかった。

次の朝、米にクワレカレーをかけて食べた。ミソン干しとふりかけでなかなかうまかった。食後のかたづけやテントの撤収に時間をとり出発は7:20となってしまった。昨日の天気はどこに行ってしまったのか今日は雲ひとつない良い天気である。一切もなく快適な歩行であったがP.1921をこえても次第にササはなくなりなかった。1915

《第16回》

日時：昭和43年12月15日～16日

天候：15日くもり　16日はれ

メンバー：大田，井上(富)，松本
千葉，佐藤

コース：新原町田……小田原…
富士……富士宮＝白糸滝
―篠崎―一本―元村山
―一本(十字路)―勢子辻
―十里木＝猪ノ頭牧場
……新町松田

紀行文

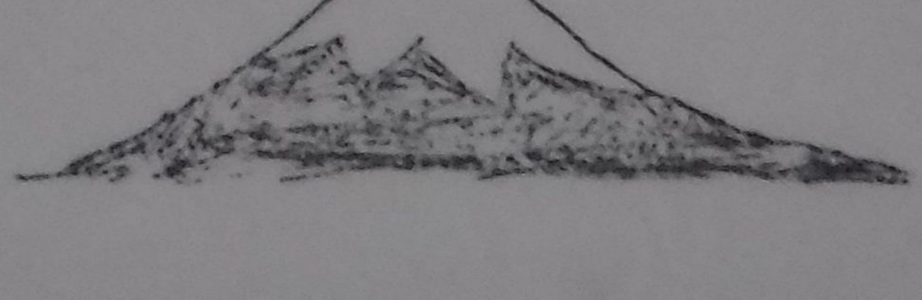
佐藤千秋

白糸の滝から十里木まで，ほとんど全部舗装されていた。オリエンテーリングでした。富士山がとても近くできれいでした。

(これが最後のワンデリングにしてはなんだかものたりなかった。)

コースとしては，道路ばかりなのでおもしろくないので，

☆夜は富士Stationビバークでした。



の途中までケケに苦しめられた。毛無山へ向うと、今度はアザミの道である。もう枯れていたのでトゲの部分だけがとれてソックスの中へと入ってとてもやりきれない。毛無の頂上からの富士は絵に書いたようであり、小屋い跡もあり、リンドウ登山道もあった。しかしこの頂も地蔵峠までさほどや不直となってしまったが、毛無までの道にくらべた分、林道というにふさわしかった。ここの辺りもいつもふんだんに落葉になく雑木々やぶにふさがれていた。一部勇払林の送電線の下り所までは毎年刈りをしていると見えて良く整備された道であったが、長者ヶ岳までの道はほとんどがやぶの中であった。ここから天子ヶ岳までは東海道自然歩道となっていて自動車もやっと通れそうな道である。天子からの下りは富士なみ牛が多い感じのおおであった。

富士山一週
ワンデリング
概略図

三ッ峠
河口湖
西湖
精進湖
本栖湖
竹化峠
小中湖
富士山
三国峠
白糸滝
位牌岳
金時山

オク
御座山
茅ノ岳

《編集後記》

種々の問題がありましたが それらを
も いちおう「やまぐつ」を発行する
ことができました。各方面で協力し
て下さった人にお礼申しあげます。

——————————— 会報役員 鳥沢太郎

T.K

S.W.V.O.B